

2008-09 年度カリキュラム報告

ーアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの中上級日本語集中教育ー

松本 隆

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターは、日本研究の専門家や日本関係の実務家などを目指す人々に、中上級レベルの日本語を集中的に指導する教育機関である。

当センターでは、40 週間におよぶ年間コースと、6 週間の夏期コースの、2 種類の日本語プログラムを実施している。2008-09 年度の年間コース修了生は 55 名、それに続く 2009 年 6 月から 7 月の夏期コース修了生は 38 名であった。両コースの実施内容について以下に報告する。

2 年間コースの概観 (40-Week Intensive Program)

2008 年 9 月 1 日から翌 2009 年 6 月 5 日までの 40 週間にわたって年間コースを実施した。本コースは 4 つの学期からなり、9 月開始から 10 月末の秋休みまでを第 1 学期、11 月から 12 月の冬休みまでを第 2 学期、翌新年 1 月から 3 月の春休みまでを第 3 学期、そして春休み明け以降コース終了までを第 4 学期とし、1～2 学期をまとめて前期と呼び、3～4 学期を後期と呼んでいる (表 1 参照)。

表 1 2008-09年度40週間の年間コース日程

週	10:00-11:50 午前クラス授業	13:30-15:00 午後クラス授業 水曜は午後のクラスなし			
1	オリエンテーション・試験・面談	オリエンテーション・面談など	↑ 1 学期 9/1-10/24 8 週間 ↓		
2	文法復習 Japanese Grammar Review	総合運用 I Applied Japanese Skills I			
3					
4					
5					
6	待遇表現 Formal Expressions				
7	秋休み 1 週間 10月25日(土)～11月 3日(日)				
8	接続表現 Conjunctive Expressions	総合運用 II Applied Japanese Skills II		↑ 2 学期 11/4-12/19 7 週間 ↓	
9	統合日本語 I IJ: Integrated Japanese Advanced Course I	総合運用 III Applied Japanese Skills III			
10					
11					
12					
13	冬休み 3 週間 12月20日(土)～1月12日(月)				
14	統合 日本語 II IJ II	選択 A Elective Course A	選択 B		↑ 3 学期 1/13-3/6 8 週間 ↓
15	プロジェクトワーク	プロジェクトワーク Project Work			
16					
17					
18					
19	春休み 2 週間 3月 7日(土)～3月22日(日)				
20	上級 日本語 Advanced Japanese	選 択 A	選 択 B	↑ 4 学期 3/23-6/5 11週間 授業は実質 8 週間 ↓	
21	プロジェクトワーク	プロジェクトワーク			
22					
23					
24					
25	GW休み 1 週間 4月29日(水)～5月 6日(水)				
26	上級 日本語	選 択 A	B		
27	試験、発表準備 発表会 2009.6.2 火-3 水	試験、発表準備 発表会 2009.6.2 火-3 水			

午前と午後の授業の違いを端的にまとめるなら、午前は日本語の構造や知識に関する言語形式面を重視し、午後は聴読解や発話など言語運用の技能を伸ばす、という力点の置き方に差異がある。午前は「文法復習」「待遇表現」「接続表現」「統合日本語」「上級日本語」を必修科目とし、後期には「選択A」「選択B」という選択必修科目を「統合日本語Ⅱ」「上級日本語」と並行して実施した。午後は「総合運用」が1学期から3学期まで続き、4学期の午後は「プロジェクトワーク」を行った。各学期の教育内容について、次の第3節から順に報告する。

3 第1学期の教育内容

1学期から3学期を通し、午前の授業は月曜から金曜までの5日間50分授業を2コマ（途中10分間休憩）行い、昼食をはさみ午後は水曜を除く4日間90分間授業を1コマ行った。平均的な1週間の構成は次の通りである。

第1学期	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
10:00-10:50	文法復習5週間+待遇表現2週間				
11:00-11:50					
13:30-15:00	総合運用 I		総合運用 I 6週間		

3-1 文法復習 (Japanese Grammar Review)

入学直後の1学期午前にはまず、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向

上させる。教科書として、当センター編集発行の市販教材『*An Introduction to Advanced Spoken Japanese*』（略称 A S J）あるいは当センターで作成した内部教材『*Japanese Grammar*』（略称 J G）のどちらか一方を、学生の日本語習熟度に応じて使い分けた

また学生は予習に際して、印刷された教材だけではなく、当センター開発のコンピューターソフトウェアを利用し、文法項目のドリル練習と、会話の口慣らしにも励んだ。

3-2 待遇表現 (Formal Expressions for Japanese Interaction)

文法復習に続く午前の授業では、円滑な人間関係を構築できるよう、敬語とその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を取り上げた。教材として当センターが作成した『待遇表現』（ジャパントイムズ社刊）を使い、それに準拠するソフトウェアを学生の予習用に提供した。

3-3 総合運用 I (Applied Japanese Skills I)

午後の授業「総合運用」は主として、読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、文字通り総合的な日本語運用力の向上を目指した。

第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」というユニットから開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを総合的に活用する機会を提供した。続いて「新聞入門」「ニュース入門」「新聞ニュース」という社会性をおびたユニットに進み、日本事情や時事的話題に関する語彙・表現の習得と運用力向上を促した。

4 第2学期の教育内容

2学期も1学期と同じく、午前5日間50分授業を2コマ、午後は水曜を除く4日間90分授業を1コマ行った。

第2学期	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
10:00-10:50	接続表現 2 週間 + 統合日本語 I (IJ) 5 週間				
11:00-11:50					
13:30-15:00	総合運用 II		総合運用 II 7 週間		

4-1 接続表現 (Conjunctive Expressions in Japanese)

接続詞に特に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方（複段落の作成）について指導した。使用教材は当センターが開発した内部教材「接続表現」を用いた。なお本教材は近日中の市販に向けて細部の編集・調整作業を進めている。

4-2 統合日本語 I (IJ: Integrated Japanese Advanced Course I)

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、独自開発教材『統合日本語 *Integrated Japanese Advanced Course*』を用いた。各課は同一の話題をめぐる「文章編」と「会話編」からなり、「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した（5-1 節「統合日本語 II」参照）。

4-3 総合運用 II (Applied Japanese Skills II)

一般的な社会問題をめぐる生教材、つまり読物と関連ビデオ（例えば報道番組）などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、類似した一般的な話題についても日本人と話し合える能力を獲得させる。この総合運用 II では、話題シラバスのモジュール型教材群「ものづくり」「文化の発

信」「外国人と国籍」「地球環境」「働く女性」「教育制度」「差別と人権」「若者たち」のなかから学生の興味や関心あるいは必要性に応じて教材を選び、各クラスの理解度に合わせて授業進度を調整した。

5 第3学期の教育内容

冬休みが明けた新年の1月から第3学期が始まる。コースの後半（3～4学期）になると、前半と異なり、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業が増える。必ず履修すべき授業時間数はコース前半と同じく、午前50分授業2コマ5日間、午後は水曜以外90分授業4日間で変わらないが、放課後の15時15分以降に自由選択授業（6-4節参照）を火・木・金に実施した。

第3学期	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
10:00-10:50	選択A	統合日本語(IJ)Ⅱ		選択A	選択B
11:00-11:50					
13:30 -15:00	総合 運用Ⅲ	総合 運用Ⅲ		総合 運用Ⅲ	総合 運用Ⅲ
15:15-		書道古筆		ビジネス	文語文法

5-1 統合日本語Ⅱ (IJ: Integrated Japanese Advanced Course Ⅱ)

第3学期で全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」だけである。週2日、火曜と水曜の午前2時間ずつ計4時間をこの「統合日本語Ⅱ」にあてた。2学期と3学期の「統合日本語Ⅰ・Ⅱ」は全体として次のような5課から構成される。

統合日本語Ⅰ	第1課 「こんにちは」の表現効果	文章編＋会話編
(上巻)	第2課 家庭のない家族の時代	文章編＋会話編
	第3課 膝詰め談判を助けるもの	文章編＋会話編
統合日本語Ⅱ	第4課 現代社会の年中行事	文章編＋会話編
(下巻)	第5課 まちがった経済指標	文章編＋会話編

5-2 選択A (Elective Course A)

3～4学期の午前週2回（月曜と木曜）各学生は、自己の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組んだ。6種の選択コース「文化人類学」「政治経済」「美術史」「文学」「歴史」「法律」を開設し、学生は基本的に3～4学期に同一のコースを継続履修した。

5-2-1 文化人類学 (Cultural Anthropology)

文化人類学や社会学などのテキスト、また一般の雑誌記事、さらに実際の研究・調査報告などを素材として、現代日本社会について考えた。3学期は、家族、農業、エスニシティ、ならびに社会を取りまく諸問題を扱った。4学期は各学生の専門や興味に応じて様々なテーマを扱いながら考察を深めた。

5-2-2 政治経済 (Politics/Economics)

日本の政治と経済に関する基本的な知識と語彙を導入したのち、細分化した話題へと移行した。3学期は、小泉改革、地方自治、従軍慰安婦、国際関係、教育基本法、外交問題などの話題を扱った。4学期は、自由貿易協定 (FTA)、企業と環境問題、知的財産、日米・日中関係、日本経済の対策と予測など、各種話題を取り上げ多様な素材に習熟させた。

5-2-3 美術史 (Art History)

3学期は、明治時代に形成された「日本美術史」という概念をまずおさえた上で、各学生の研究テーマに関する論文を学生自身が選び、それをもとに話し合いを行った。4学期はさらに個々の研究の関心に焦点をあて、日本美術の分野に限らず、仏教美術、建築、写真、映画、書誌文献学などを広く扱った。

5-2-4 文学 (Modern Literature)

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、理解・鑑賞したのち話し合いを行った。おおむね2～3回で1作品を読んだ。文学を専門としない履修者にも配慮し、文学作品の理解・鑑賞・討論という形態にとらわれることなく、幅広い授業活動を柔軟に盛り込んだ。

5-2-5 歴史 (History)

古代から近現代までの日本史上の諸トピックを取り上げ、日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ねた。まず通史概説書を利用して歴史学分野に必要な語彙・表現の習得を図った。この共有知識を踏まえ、各学生の個別テーマに関する論文の読解、発表と話し合いなどを実施した。また、一次史料を読む練習を定期的に組み込んだ。

5-2-6 法律 (Law)

日本の法律全般、特に憲法、刑法、民法、会社法、国際法、裁判員制度、知的財産権などについて、判例も扱いながら指導した。条文の読解練習に力点を置くとともに、専門重要語彙の確認練習を積み重ねることにより、法律文書の理解力を伸張させた。また、各学生個々のテーマを取り上げたり、裁判を実際に傍聴するなどの体験学習も組み込んだ。

5-3 選択B (Elective Course B)

選択Bでは日本語力の増強あるいは周辺分野の指導をした。本年度は、

3学期に「スピーキングⅠ」「リスニングⅠ」「リーディング」「ビジネス日本語」の4種、4学期には「スピーキングⅡ」「リスニングⅡ」「ライティング」「現代小説」の4種を開講した。各内容については6-2節を参照。

5-4 総合運用Ⅲ (Applied Japanese Skills Ⅲ)

3学期の午後は「現代史」「大衆文化」「ビジネス・社会」の3コースのうち1つを選択する。各コースとも、読物を理解したりビデオを視聴したり、さらにその話題について討論をするなどの諸活動が盛り込まれている。

5-4-1 現代史 (Modern History)

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の歴史を、特に戦後を中心にビデオと読み物で概観した。「戦前の日本 1900-45」「敗戦と復興 1945-55」「高度成長 1955-70」「現代の日本 1970-95」などの話題を取り上げた。

5-4-2 大衆文化 (Popular Culture)

広い意味での日本の“大衆文化”に関して日本人と話せるようになることを目標とした。「CM」「映画」「漫画」「文化政策」「伝統文化・古典芸能」などの話題を取り上げた。

5-4-3 ビジネス・社会 (Business/Modern Society)

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「バブルの前と後」「創業者」「通産省と大蔵省」「平成不況」「雇用制度」「系列」「マネーゲーム」などの話題を取り上げた。

6 第4学期の教育内容

1～3学期を通じて午後は「総合運用」というクラス授業の形態をとってきたが、4学期の午後は個別指導のプロジェクトワークを行った（下の表中ではPWと略す）。

第4学期	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
10:00-10:50	選択A	上級日本語		選択A	選択B
11:00-11:50					
	文語文法	書道古筆		ビジネス	
13:30-14:20	PW	PW	PW	PW	PW
14:30-15:20	PW	PW	PW	PW	PW

6-1 上級日本語 (AJ: Advanced Japanese)

4学期の火曜と水曜の2日間は、日本語のおもに形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。具体的には、まず最初の週（第30週）の2日間で1学期に扱った「待遇表現」の補足と整理を行い、次の週（第31週）2日間をミニ発表会にあてた。このミニ発表会は、前学期までに「統合日本語」などで学んだ知識・技能を整理しなおし、各学生が自己の到達点を把握するとともに、年間プログラム終了までの約2か月間をいかに有効に過ごすか、その自覚を促す契機と位置づけた。その後、標準的なクラスでは「対談・インタビュー」「評論」「論説」などの読み物素材を扱いながら、内容に関連した発話活動などを通じて、既習事項を総ざらいし日本語の知識をより確実なものにするるとともに、上級日本語話者が知っておくべき事項の欠落箇所を補うなどした。なお各クラスとも学生の到達度、興味、要望に応じて各種の補助教材を付け足しながら活発な授業運営を目指した。

6-2 選択B (Elective Course B)

先の5-3節で触れたように、3学期に「スピーキングI」「リスニング

I」「リーディング」「ビジネス日本語」、4学期に「スピーキングⅡ」「リスニングⅡ」「ライティング」「現代小説」の各4コースを開設した。

6-2-1 スピーキング (Speaking)

発話力伸張の訓練を行った。具体的な教室作業は学生の日本語習熟度や要望によりクラスごとに異なるが、次のような練習（のうちいくつか）に取り組んだ。i) あらたまった状況、例えば大学院での演習場面を想定し、発表、司会、討論をする。その際、発表者は要旨と論点を事前に準備し当日資料を配付する。ii) 1分間スピーチ、要点を簡潔にまとめて話す練習。iii) 敬語の使い分け、改まった場面を想定しての役割練習。

6-2-2 リスニング (Listening)

聞き取りの手がかり（音のくずれ、韻律の機能など）に言及しつつ、実際のテレビ番組、例えばニュースやニュース解説、教養番組、討論番組、ドラマなどを素材にして、精聴をはじめ聞き取りの訓練を積み重ねた。

6-2-3 リーディング (Reading)

精読の練習として「日本人論」などに関する評論文を素材に用いて論旨の展開を読み取る訓練を行った。

6-2-4 ライティング (Writing)

随筆から小論文まで、目的に合った幅広い文章表現力の習得を目的とした。毎週、宿題として各種の文章を書き、授業ではそれを全員で検討・批判しあい、日本語らしい文章の書き方と推敲の技術について考察した。

6-2-5 ビジネス日本語 (Business Japanese)

学生から就職活動を経て新社会人に移行する過程で遭遇する状況を設定し、役割練習を積み重ねながら発話力の伸張を図った。また模擬就職面接

を行い事例に即した解説を加えながら実践的な指導をした（6-4-4 節「ビジネス」参照）。

6-2-6 現代小説 (Contemporary Novel)

現在よく読まれている作家の短編小説を毎週 1 作品ずつ取り上げた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、宮部みゆき、村上龍、川上弘美、綿谷りさ、向田邦子、筒井康隆、などの短編を扱った。

6-3 プロジェクトワーク (Project Work)

3 学期の最終週の午後と、4 学期の午後すべてをプロジェクトワークにあてた。この活動では、各学生が自己の専門や興味ある分野の主題を選び、その内容に比較的詳しい教員から個別の助言を受け、実地の調査研究や文献の読解などを行った。本年度は、興味が近い 2 名の学生が組んでプロジェクトを進めたほかは、みな個人プロジェクトであった。

6-4 選択 C (Elective Course C)

3～4 学期に自由選択コースとして「文語文法」「書道」「古筆」「ビジネス」の 4 種を開設した。「書道」のみ 1 学期から年間を通して実技指導を行い、ほかの 3 コースは後期の 3 学期から開始し講義形式を中心に、各分野の外部専門家が週 1 回指導した。

6-4-1 文語文法 (Classical Japanese Grammar)

文語文法の基礎から指導し、古典の読解へと進んだ。3 学期の授業は毎週金曜 15 時 15 分～16 時 45 分、4 学期は月曜 14 時 30 分～16 時 00 分に授業時間を設定し、国際基督教大学講師の金山泰子が指導に当たった。

6-4-2 書道 (Calligraphy)

書道の心得や筆の運び方などの基本から開始し、最終的には自作の落款付き作品を仕上げるまでに至り、掛け軸に表装した作品は卒業発表会場に展示した。指導は毎週火曜日、1～3学期は15時15分～16時45分、4学期は14時30分～16時00分に、書家の小林絃子が講師を務めた。

6-4-3 古筆 (Classical Handwriting)

手書きの古典文献を理解するのに欠かせない古筆の読解練習を段階的に進めた。上記の書道コースと同じ書家の小林絃子が講師として、書道終了後の60分間ひと月に3～4回の指導を重ねた。

6-4-4 ビジネス (Business)

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯と今後の展望と課題について講義した。3学期の授業時間は毎週木曜15時15分～16時15分、4学期は同12時15分～13時15分であった。講師は浜銀総合研究所顧問の湧井敏雄が担当した。なお選択B「ビジネス日本語」と連携する形で、就職面接の実践指導も行った(6-2-5節「ビジネス日本語」参照)。

7 通年で実施した学習指導と行事など

7-1 アドバイザー制と評価 (Advisory System and Evaluation)

学生1人に専任教員1名がアドバイザーとしてつき、年間を通して学習上および生活上の助言・指導をした。本年度55名の学生を8名の専任教員で分担し、各教員7名ほどの学生を受け持った。

定期的な個人面談として、入学直後に2回そして各学期末に4回、合計6回の面談を年間の日程に組み込んだ。9月初めの面談は診断的な評価であり、入学直後に実施した筆記試験(テープによる聴解試験を含む)と発話試験の結果を踏まえ40週にわたる学習の指針を示した。

1～3学期末の個人面談は形成的な評価である。学生が履修したクラスを担当する教員の評価および学習上の問題点や改善策をまとめて、学生に還元した。

各クラスでは、試験または試験に代わる小規模な発表、日々の小テストなどによって、学生の到達度・伸び具合を把握した。これらのテスト結果や、授業を担当する教員が日頃の観察から得た情報を、教員間で共有しあい、その後の指導に生かした。

4学期末つまり年度末の個人面談は総括的な評価となる。年間コース終了直前に、入学時と同様の筆記試験・発話試験を実施し学習成果の客観的把握に役立てた。

アドバイザーは、担当学生の漢字プログラム（次節参照）の進捗状況を確認・促進する目的で週1回程度、漢字の読み方・発音指導などを行った。

7-2 漢字プログラム（スキップSKIP: Special Kanji Intensive Program）

常用漢字習得のためのプログラムである。自学用教材として当センター編集発行の市販教材『*Kanji in Context*』（ジャパンタイムズ社刊）を用いた。漢字を単独で取り上げるのではなく、熟語、例文と共に学習する。学生は、ワークブックおよびコンピュータで独習し、翌朝クイズを受け、教材助手が採点するという形で、それぞれの進捗で学習が継続できる。卒業時までには1947字（常用漢字+2字「誰」と「賂」）が習得できる標準日程を組み、各教室には「今週の漢字」を掲示し学習促進の一助とした。

7-3 講演会と行事（Lectures and Other Educational Opportunities）

平日の授業時間帯に全学生を対象とする講演会を3回（10/10と11/7と4/27）一斉校外学習を2回（9/26と2/26）開催した。また、選択必修コース授業の一環としてコースで独自に実地見学におもむいたり、毎週金曜の放課後に映画を上映するなど、様々な学習機会を設けた。本年度の諸行事を実施順に表2の一覧にまとめた。

表2には、本センターの主催行事と、相手方の団体との共催行事、あるいは先方から招待を受け本センターが仲介した行事、さらに学生有志が全学生に呼びかけて自主運営した企画を記載した。

表2 2008-09年度 行事一覧

2008年

- 9月 5日(金) 入学祝賀会、横浜国際協力センター共用会議室にて
- 9月11日(木) 防災説明会(避難訓練) 兼ごみ分別説明会、国際協力センター共用会議室
- 9月26日(金) 横浜の日：市内諸施設を訪問し横浜に親しむグループ別校外学習
 自然観察組：横浜自然観察の森、開港麦酒組：横浜開港資料館と麒麟
 ビール生麦工場、歴史芸術組：神奈川県立歴史博物館と横浜美術館
- 10月 4日(土) 鶴岡八幡宮「流鏝馬神事」に希望者を引率
- 10月10日(金) 講演会「少女の時代：戦前の少女雑誌文化の誕生と発展」
 ドラージュ土屋浩美、ヴァッサー大学中国語日本語学科助教授
- 10月17日(金) 映画鑑賞会「東京タワー：オカンとボクと時々オトン」希望者対象
 これ以降前期の毎週金曜に映画会を教室で実施
- 10月31日(金) 横浜市立大学「浜大祭」キャンパスツアーに希望者を引率
- 11月 7日(金) 講演会「最初の日本人女性留学生：大山捨松の生涯」
 久野明子、日米協会理事
- 11月29日(土) 感謝祭パーティー、横浜市国際学生会館、学生有志による自主企画運営
- 12月 5日(金) 文楽鑑賞教室、国立劇場に希望者を引率(観劇料自己負担)
- 12月16日(火) 鶴岡八幡宮「御鎮座記念祭・御神楽」に希望者を引率
- 12月19日(金) 忘年会、横浜国際協力センター共用会議室にて

2009年

- 2月 7日(金) 横浜かもんやま能、横浜能楽堂、希望者2名無料招待
- 2月22日(日) 神道国際学会セミナー「外国人研究者が語るお伊勢さん」希望者引率
- 2月23日(月) 大衆文化コース講演会「雅楽における普遍性と独自性」
 石川高、雅楽演奏家
- 2月26日(木) 専門分野別校外学習～選択Aコースごとの実地見学会
 横浜中央図書館、横浜地方裁判所、神奈川近代文学館、
 日本新聞博物館、東京国立博物館、国会議事堂、JICA、
 ワタリウム美術館、サントリー美術館、野毛・黄金町探訪
- 3月21日(土) 横浜市港北区川和町「山鳴庵」日本伝統文化講座に希望者を引率
- 4月 2日(木) 法律コース講演会「知的財産」山口朔生、山口特許事務所弁理士
- 4月23日(木) 政治経済コース講演会「中国の経済発展と日中経済関係について」
 阿部宏忠、日本貿易振興機構JETRO 貿易投資相談センター主査
- 4月25日(土) 久良岐能舞台「雅楽の楽しみ」希望者2名無料招待
- 4月27日(月) 講演会「『ヨコハマメリー』を語る」中村高寛、映画監督
- 5月 5日(火) 鶴岡八幡宮「菖蒲祭・舞楽奉納」に希望者を引率
- 5月15～17日(金～日) 下田市主催「黒船祭り」希望者7名無料招待
- 5月26日(火) 法律コース校外学習、皇居、横浜地方検察庁
- 6月2～3日(火～水) 卒業発表会、みなとみらい21まちづくりプラザにて
- 6月 5日(金) 卒業式、卒業祝賀会、横浜国際協力センター共用会議室にて

表3 2008-09年度 卒業発表題目一覧（学生名アルファベット名簿順）

日本の医療制度：健康を守るための戦い
 婚活は会話か：言語学から見た現代日本の結婚難
 仏教の凶像と社会運動
 麻雀と法律：虚実を確かめる
 ヤクザの経済
 中世日本での中国の描写における文体と内容の相互影響
 【PW】藤原茂範『唐鏡』（鎌倉中期）の音読と英訳
 説話集に登場する動物：その象徴と役割をめぐって
 ドラッグ・ラグとは？：日本の新薬認可をめぐる問題
 琵琶湖の水文化と政治
 明治時代と大正時代に東南アジアへ移住した日本人：無視された移民
 猫からパスポートまで：RFIDセキュリティとプライバシー
 【PW】コンピューターにおけるプライバシー侵害とセキュリティ・システム構築
 ファンサブ現象と法律問題：情報の自由 vs 知的財産権
 「音楽は兵器なり」：昭和の音楽活動と美学の政治化
 SKIP内容の分析と改善
 弾むプロパガンダ：ゴムボールと戦時下日本
 日本語の文体シフト：です・ます体と普通体のポライトネスと意識への依存に関する研究
 街空：人間と建築との間の空間
 精密な時計のない時代における時間認識
 公の「オタク」のイメージを左右する秋葉原
 杜の郷：横浜の新たな児童養護施設
 「小説化」：徳川時代における中国白話文学の発現
 日本の公立小中学校における多文化教育
 ビジネスにウェブを有効活用する
 芸術における自然と人工の境界
 山角：隠れ家のパン屋カフェ
 【PW】図書館関連の文献読解と国会図書館職員への聞き取り調査
 知的財産のゴジラ：特許ゴロと日本におけるその影響
 日本におけるブログとアフィリエイト・マーケティング
 山梨ワイン産業
 日本の対中政策：バインディングとヘッジング
 ロック・スター：日本の音楽業界での名声を追いかけて
 なめんなよ、就活の野郎！
 日本研究センターを普及させましょう：Kanji in Context を iPhone に
 桐野夏生と女性の醜さ
 聖書に影響を受けた日本語の表現
 戦時下の日本帝国と地方文化—『民俗台湾』を中心として
 高橋由一の作品と彼の螺旋展画閣：快樂の園の螺旋建築
 四つの文脈から見るサンフランシスコ講和条約
 水平社と日本の近代：協力と対立の間
 多色の絵本
 社会の隅々まで明るく照らす法テラス
 私の理想的なラーメン
 江戸の浮世絵：鈴木春信の美人画
 福岡3児死亡事故の判決は飲酒運転の逃げ得を許したのか：
 飲酒ひき逃げ事犯に対する「厳罰」とは 【PW】刑法をめぐる文献の多読
 戦後の「混血児問題」：優生学、ナショナリズム、性交の政治学
 長寿の秘訣：沖縄からの教え
 サタンの眼：エフレム説教歌『罪深い女』と罪の発見
 日本のプロ野球は将来どうなるか
 サケの近代化：北海道の缶詰産業の発展 【PW】人間と自然の関係をめぐる文献の読解
 自作映画『中国：帝国の復活』を語る
 形態と心理：ハウルの教え
 飛べないエンゼル：エンゼルプランという少子化対策
 無色的人種化：在日韓国・朝鮮人に関わる人種差別と同化
 神風特攻隊：定められた運命と本音

8 卒業発表 (Final Presentation)

卒業発表会は 10 か月間にわたる学習を締めくくる催しである。各学生は、来賓と全教職員学生の前で、質疑応答を含め 1 人 15 分の持ち時間内で、やや改まった形式の発表をした。

卒業発表の題目一覧を表 3 に示す（学生名簿順であり実際の発表順とは異なる）。プロジェクトワークの成果を卒業発表会で披露した学生が多かったが、プロジェクト以外の発表も 5 件あった。その 5 件については、一覧表の発表題目につづきプロジェクトワークの内容を【PW】として示した。

9 夏期コース (Summer Program)

冒頭で触れたように本センターでは、40 週間におよぶ年間コースと、6 週間の夏期コースを実施している。上の第 8 節までに 40 週間の年間コースについて報告したので、この第 9 節では、それに続く 6 週間の夏期コース内容について略述する。

本年度の夏期コースは 2009 年 6 月 18 日（木）より 7 月 31 日（金）まで 37 名の学生を 6 組に分けて指導した（別に 1 名を個人指導学生として受け入れた）。6 組のうち 1 組は同年 9 月から始まる年間コースへの入学条件として、本夏期コースの履修を課された 6 名のために編成したクラスである。この 6 名とは別に年間コース入学予定者 5 名が自ら望んで夏期コースに参加した。

6 月 18 日（木）にクラス分け試験、19 日（金）に学習指導説明会と歓迎会を行い、実際の授業は 6 月 22 日（月）から開始した。授業時間は、午前 9 時 40 分から 12 時 30 分まで 50 分授業を 3 コマ、午後は 1 時 30 分から 2 時 20 分までの 50 分授業 1 コマ、計 4 コマの授業を毎日継続した。

金曜日の午後は校外学習として教室を離れ実地見学などにおもむいた。平常授業以外の校外学習や催事などを以下にまとめる。

▽2009年 夏期コース行事▽

- 6月18日(木) クラス分け試験(筆記、聴解、発話)
- 19日(金) 学習指導説明会(全体ののちクラスごとに)、歓迎会
- 26日(金) 校外学習① 総持寺の拝観と座禅体験
- 7月2日(木) 映画「ぐるりのこと。」ランドマークホールに希望者を引率(自費) 19:00-21:20
- 3日(金) 校外学習② 歌舞伎鑑賞教室「矢の根、藤娘」国立劇場
- 10日(金) 午前中間試験、午後映画上映会「おくりびと」
- 17日(金) 校外学習③ 横浜開港資料館・神奈川県立歴史博物館見学
18:00-20:00自由参加「夕涼み会」IUC 港の見える庭園
- 24日(金) 校外学習④ 班別に東京探訪… A 東京国立博物館、
B 国会議事堂、C 靖国神社・遊就館、D 江戸東京博物館
19:00より落語鑑賞、上野広小路亭に希望者引率(自費)
- 29日(水) 午前期末試験、午後発表会準備
- 30日(木) 発表会ひとり10分(質疑応答を含む) 2教室で同時進行
- 31日(金) 午前クラス担任と個人面談、13:00より修了式と祝賀会

10 おわりに

これで 2008-09 年度の年間コース(40 週間)と夏期コース(6 週間)の実施報告を終わる。上述外の特記事項として本年度、全教室にコンピュータと大型モニター画面を配備し、動画と音声を中心とした教材のデジタル化を進め、運用効率の向上を図った。

教材開発の面では、先の 7-2 節で触れた漢字プログラムの改良を進め、2009 年秋ついに iPhone 上で漢字独習ソフトとして公開する運びとなった。また 4-1 節で述べたように『接続表現』の公刊も決定した。これら以外に

も、本センターがこれまで独自に開発し内部で試用と改良を重ねてきた教材群を順次公開し、言語教育界全体の共有材とする準備を現在進めている。

日本語学習熱が世界的に高まりゆくなか、本センターは日頃の地道な教育活動とあわせて、独自開発教材の公刊を通して語学教育界に貢献するとともに、各方面からの批判を仰ぎ日常の教育内容の改善に還元していきたいと考えている。

(まつもと たかし／本センター言語課程主任)